

2016年度全カリシンポジウム

しょうがい学生にとっての外国語学習

—その意味、そして教育と支援へのアプローチ

日時：2016年11月5日(土) 14時00分～16時30分

場所：池袋キャンパス 11号館3階A301教室

基調講演：宮城 愛美	筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター障害者支援研究部（視覚障害系）講師
事例報告：佐藤 邦彦	全学共通カリキュラム運営センター言語系科目構想・運営チームスペイン語教育研究室主任／異文化コミュニケーション学部教授
新野 守広	全学共通カリキュラム運営センター言語系科目構想・運営チームリーダー、ドイツ語教育研究室主任／異文化コミュニケーション学部教授
コメント：大島 康宏	コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科2年
司 会：石坂 浩一	全学共通カリキュラム運営センター言語系科目構想・運営チーム諸言語教育研究室主任／異文化コミュニケーション学部准教授

石坂 本日はお越しくださしまして、ありがとうございます。司会を務めさせていただく全学共通カリキュラム運営センター朝鮮語担当、異文化コミュニケーション学部の石坂と申します。よろしくお願いたします。本日のシンポジウム「しょうがい学生にとっての外国語学習—その意味、そして教育と支援へのアプローチ」開催に先立ちまして、なぜこうしたテーマを掲げたのかを簡単に申し上げます。



石坂 浩一

第一に、立教大学ではすべての学部学生に対し、英語と、ドイツ語・フランス語・スペイン語・中国語・朝鮮語、加えて、文学部はロシア語、留学生は日本語も含まれますが、そのうちの一つ、あわせて二つの外国語を必修としております。そのため、各言語の研究室は、しょうがいをもつ学生に必ず対応することとなります。しょうがい学生に対してどのように向き合っていくかという課題は我々が関心を持たざるを得ない領域なのです。

第二に、外国語教育は、一般的に話す・聞く・読む・書くという「4技能」の発展を図ることを目指しております。しかし、しょうがいのある学生には、この4技能の一定の部分について学習が難しいという現実があります。それでもできる限りほかの学生たちと共に学ぶことができる条件を整え、なおかつ学生本人にとって意味のある外国語学習の機会を保障できないだろうかと私どもは考えてまいりました。

現在、外国語教育を担当しております私ども言語チームは、視覚や聴覚のしょうがいのある学生の入学が決まりましたら、入学前、3月の段階でその本人や保護者と面談をします。しょうがいの度合やどのようなサポートが必要かということを聞き、しょうがい学生支援室の協力も得ながら、授業開始前に適切なクラス配当や担当教員への配慮依

頼を行っています。しょうがいのある学生の入学が増えてきている一方で、私ども教員自身は、そうした学生への外国語教育の経験が十分にあるとは言えません。手探りの状態ですが、場当たりの対応に終始してはいけなと、2015年度から経験蓄積のために統一した様式で対応の記録を残そうということで、しょうがい者支援ネットワークのワーキンググループと話し合いを始めたところです。こうした自覚的な経験と知識の共有というのは本当に始まったばかりで、日々知らぬことの多さに驚かされています。

このシンポジウムを契機に、私どもはより広い視野をもってしょうがい学生の学習支援に取り組み、その質をさらに高いものへと発展させていくことを目指しております。本日は視覚しょうがい者の学習やその支援について専門的に研究をされている、筑波技術大学の宮城愛美先生にお話を伺うとともに、私どものささやかな経験を報告し、また本学で学ぶしょうがい学生からも率直な声を聞きたいと思いコメントを依頼いたしました。正直なところ、私ども教員も試行錯誤の連続で、しょうがい学生の立場から見て本当に役に立てたのだろうか、かえって迷惑だったのではないかと心配になることもございます。一緒に大学教育をつくり上げていくという意味でも、本日のこの場で率直な意見交換ができればありがたく思います。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

はじめに、宮城愛美先生に基調講演をしていただきます。宮城先生は、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター障害者支援研究部（視覚障害系）で教鞭をとっていらっしゃいます。どうぞよろしくお願いいたします。

基調講演

視覚しょうがい学生の外国語学習環境と支援の課題

宮城 愛美氏

筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター障害者支援研究部（視覚障害系）講師

宮城 私は視覚しょうがいの学生の教育にかかわって10年ほどになります。ただ、語学教育に関してはまったくの素人ですので、私からは、視覚しょうがいのある学生の学習環境がどういうものか、その前提として、視覚しょうがいのある人のニーズや、そのしょうがい特性といった基礎になる部分をお話しさせていただきます。



宮城 愛美

視覚しょうがいの特性

まず、視覚しょうがいの特性について、皆さんと共通の理解を持ちたいと思います。基本的な質問を3つご用意しました。皆さんはよくご存じのことかもしれませんが、一般的にはこのあたりの理解がまだまだ低いことを認識していただくために、あえてお聞きします。

1つ目、「視覚しょうがい者は全員が点字を使用する」。2つ目、「移動の際、全盲の人は常に支援者と移動する」。3つ目、「弱視の人は、文字を拡大すればよく見える」。どうでしょうか。これらの答えはすべて「ノー」なのです。

視覚しょうがいというのは、「盲」や「全盲」といって視覚情報をほとんど利用できない方と、「弱視」と呼ばれる、矯正視力が低かったり、視野が狭かったりする方に分類されています。こうした視覚しょうがいでは、主に情報アクセスの困難さというところでの支援が必要だといわれています。聴覚や触覚といったさまざまな感覚を活用することが支援の基本になってまいります。

その感覚を利用したさまざまな支援技術というものがあります。つい最近までは専門的な技術や機器が非常に有力だったんですけども、最近では、タブレットやスマートフォンに置き換わり、より身近で手軽な支援が可能となっております。忘れてはならないのは、こうした技術によって独力でできる部分が増えたとしても、人的サポートが必要な部分は必ず残っているということです。

視覚しょうがいのある方のニーズは何か。大きく分けて、「移動」と「文字のアクセス」だといわれています。そのうちの「文字のアクセス」ですが、情報リテラシーは人によってかなり違います。それぞれの学生が大学までに受けてきた教育はさまざまです。個人の得意、不得意によっても、どういった支援技術が使えるか、どういった媒体が読みやすいかも異なってきます。最近は電子化が進み、メール、電子ファイル、ウェブといったものは、パソコンやタブレット、スマートフォンで閲覧することでアクセスしやすくなっております。文字のアクセスに関しては「支援技術」と「メディア変換」の2つが重要になってまいります。

まずは基本的な部分をお話しさせていただきましたが、事前に佐藤先生からご質問をいただいております。興味深い質問が多くありましたので、この解説をすることで、視覚しょうがいへの理解をさらに深めてまいりたいと思います。

最初の質問です。視覚しょうがいのある人は色をどういうふうに理解するか。学生たちに聞いてみたところ、何のものの色かというふうに概念的に理解していることが多いようです。例えば、「リンゴは赤い」とか、「タイヤは黒い」という具合ですね。また、その色からのイメージ、「恋の色はピンク」だとか、イメージに結びつけてとらえているのではないかと思います。

次の質問は、授業で説明するときはどういう工夫をしたらいいかということです。これは私の個人的な経験ですが、もののサイズや距離感、数値を使うと理解してもら

えることがある一方で、イメージがわきにくいことも多い気がします。例えば、「100メートル」とか、「そこまで3メートルある」という表現です。ですから、そういう場合は具体的なもの、例えば、お弁当箱サイズだとか、タバコの箱、名刺のサイズ、机3つ分ぐらいあるとか、具体的で身近なものに置き換えています。ものの形状を伝えるときも同じです。

3つ目の質問です。不適切な表現や変更したほうがよい表現はないですかということです。表現として変更したほうがよいものの例として、私たちは無意識に場面の状況を、視覚的に得られる情報を前提に話していることがままあります。例えば、今、途中から人がいらっしやいました。私がおの人に突然話しかけたら、他の全盲の参加者にとっては、経緯がわからない。それは視覚に頼った情報に基づくものですね。説明する側は、そういった何かの前提で話していないかを考える必要があります。

私の好きな言葉に、「百聞は一触にしかず」という言葉があります。100個聞くのより1回触ったほうがわかるという意味です。立体物を説明するときなどは、どんなに言葉を重ねるよりも立体物を触ってもらったほうが早いんですね。授業の中では、可能な限り実物に触ってもらうことを心がけています。

最後の質問です。これには私、すごく感動しました。全盲学生が不便な思いをしているような様子は、どこで判断できますかという質問です。私は、「わかりません」と回答します。学生によっては首をかしげたりするかもしれませんが、そのサインは人それぞれです。ですけれども、この質問で、先生方が学生に寄り添い、どこがわからないのかを知りたがっている姿勢がわかり、すばらしいなと、この一言に、十分な配慮と理解の土壤があると感じました。

視覚しょうがい学生の就学と支援

視覚しょうがい者の就学と支援について、今回は点字を使われる方、点字使用者を想定したお話を中心にさせていただきます。授業でのシーンとなると、教科書や配付資料類、今の学習に欠かせないパソコン、これはタブレットやスマートフォンも含めてということですが、そして授業の中の黒板といった3つの要素があります。

教科書や配付資料は点訳が必要です。普通の書籍には、図やレイアウト、文字の装飾などがありますが、そういったものをすべて省いて文字のみのデータにするテキストデータ化というのが、最近、全盲の学生が在籍する多くの大学でなされています。拡大すると非常に見やすいので、弱視の学生向けに使われてもいます。

パソコン学習で主に使われるのは、スクリーンリーダーと呼ばれる画面読み上げソフトです。読み上げソフトではワードファイルも読めますが、レイアウトによっては読みにくいこともあるので、テキストデータを好んで使います。また、点訳したものは、紙に印刷することも、点字ディスプレイで出すこともできます。

黒板に関しては、教員の話し方の工夫で伝えるしかないと感じます。大学によって

は、ノートテイクをつけて黒板の情報をリアルタイムで伝えるということもなさっているようです。

点訳というのは、原本、例えば教科書などがあるそれを点字にしていくわけですが、多くの大学は点訳グループに依頼されているかと思います。そのグループごとに得意な分野は違います。例えば語学ではドイツ語に強いとか、理系に強い、数学に強いなど、特化した分野をお持ちのグループがあります。大学での教育はかなり専門性が高いものですから、それに応えられるグループを見つけておくことが重要です。

こういう幾つかの媒体に変換する作業のことを「メディア変換」と総称しております。メディア変換はどのように使い分けていけばいいでしょうか。学生が授業で使う媒体としては、教科書や参考書、関連書籍、その場で配られる資料などいろいろあります。どれを点字にし、どれをテキストデータ化し、録音媒体化するのか。その場で読み上げる対面朗読もあるでしょう。学生と相談して決めていくことになると思いますが、その際に大事なことは、それぞれのメディアの特徴を踏まえるということです。紙媒体や電子媒体は残しやすいですが、点訳にどうしても時間がかかりますし、量も膨大になります。資料の重要度によって、その場で急ぎのものにするのか、時間をかけても正式なものを作るのかといった判断を適宜していくことになると思います。

次に支援技術の話をしていただきますが、これは専門的な話になりますので、部分的にお話させていただきます。点字を出力する機械は、大きく分けて3種類ほどあります。まずは、電子点字器。授業のノートをとったりすることができる機械です。日本ではKGS社の「ブレイルメモ」などが使われています。次に、点字PDA。ネット接続機能がついたり、ワードなどの墨字文書をそのまま、点字データにしなくても読めたりする、高機能の電子点字器です。Extra社の「ブレイルセンス」などが使われています。あとは、点字ディスプレイ。主にパソコンに接続してパソコン画面の情報を点字に出す専用機と考えていいと思います。点字使用者はこういったメディア変換、支援技術を活用しています。

外国語学習の環境と課題

最後に、外国語を学ぶ環境についてお話しします。外国語学習で特徴的なのは辞書です。点字の紙の辞書というのは非常に膨大な量になってしまいます。紙の点字辞書一冊が書棚一つ分になることもあります。一方でデータの辞書も幾つか存在しており、スクリーンリーダーで読み上げられるようなウェブ版の辞書もあります。教科書、資料、辞書をどういった媒体で提供するか。紙はその場で見られるという利便性がありますけれども、データは、学生たちが使う機器を選択できるという利点があります。

紙の点字とデータの点字の利点、欠点を考えてみます。紙の利点は、全体のボリュームがわかるということがあります。1ページという単位の中での内容を概観できますし、両手で点字を読める学生もいますから、冒頭をちょっと拾って読んでいけばざっと

概要をつかめるというのもメリットです。表なども、紙の点字だと表すことができます。欠点は、どうしてもかさばってしまうということと、検索性があまりよくないということです。また、保存という点では、紙の点字は経年劣化で重なる部分が潰れて読みづらくなっていくというデメリットもあります。

データの利点は、携帯性にすぐれており、検索性がよいことです。また、点字そのものは劣化しません。ただ一方で、端末とバッテリーが要ります。紙ほどの手軽さはありません。今普及している点字端末というのは、基本的に1行しか表示できないという不便さもあります。

音声読み上げと点字を比較してみます。音声の利点は、ベースとなるテキストデータを作成しやすいということです。時間はかかりますが、点訳よりも手軽で、それほど特殊な技術ではありません。また、日本語の場合、漢字も表現したテキストデータが作れるというのもメリットです。欠点としては、揮発性の情報なので聞いたそばからパッと消えてしまう。そこは音声の欠点といえるでしょう。それぞれのメディアの特徴を生かして付き合っていくことになるのかなと思います。

視覚しょうがい学生が外国語を学ぶ上で有利な点はあるか、ということ時々聞かれます。外国語教育にかかわる人からは、どうやら視覚しょうがい学生は耳がよいようだという話を聞いたりもします。晴眼の学生に比べ、リスニング力がすぐれている学生が多いような気がするのと経験的に感じるそうです。会話が得意かということについては、個人の差はあるものの、視覚的な情報を補うためにコミュニケーション能力が発達している部分もあるかなと思います。

逆に、外国語を学ぶ上で不利な点は何か。読み書きの読みについては時間がかかる場合もあります。全盲の学生で、点字をものすごく早く読んで墨字と遜色ない人もいますが、弱視の学生は1文字、数文字ずつ読むので時間がかかったり、中途失明で点字がまだおぼつかない学生はかなり遅かったりします。読むのが苦手な学生がいるのは晴眼者と同じです。英語の授業でディクテーションをさせると、点字使用の学生は書かないので驚いた、という話を以前聞いたことがあります。書かないで、自分の頭の中の記憶で答えているということでした。短い文だけでなく、ある程度の長さであっても、書き取るより覚えてしまったほうが早いという学生が多いようです。

こういった特徴を聞いて思いついたことがあります。これらの特徴を、将来、就労に生かすことはできないでしょうか。実際に視覚しょうがいのある人で、電話応対を得意にしている事務職系の方もいらっしゃいます。その中で、例えば語学が得意であることを周囲にアピールできれば、海外からの電話が来たらこの人に回そうというふうな能力を発揮できるかもしれないなど、漠然とですが期待を抱いています。

視覚しょうがい学生の外国語学習では、修学環境の上での情報アクセスが鍵になります。その修学環境というのは、情報リテラシーとコミュニケーションという学生個人の素養もかかわってきますし、環境を整える上でどのような機器を使うかということも考えなければなりません。状況によって実現できるものを臨機応変に用いていくというこ

とが、現実的かつ実効性のある対応ではないかと思えます。ご静聴ありがとうございました。

石坂 宮城先生、具体的でとても興味深いお話をありがとうございました。

続いて、立教大学の全カリから2つ、簡単な事例報告を行いたいと思います。最初に、スペイン語教育研究室主任の佐藤邦彦先生からご報告をお願いします。

事例報告①

スペイン語教育研究室の経験から

佐藤 邦彦

全学共通カリキュラム運営センター言語系科目構想・運営チームスペイン語教育研究室主任／
異文化コミュニケーション学部教授

佐藤 私からは、2014年度にスペイン語を履修した全盲の学生のケースを紹介いたします。全盲学生の受け入れというのは、研究室では全く経験のないことであり、非常に苦労しました。我々も努力はしたのですが、正直申し上げて、うまくいかなかったところも、逆にそこから学んだこともあります。

まず、入学前の対応ですが、本校への入学と履修希望がわかった2月、しょうがい学生支援室で関係者との面談を実施しました。今後どうしたらいいのかまった

くわからない状態でのスタートでした。教科書の点字化にどのぐらい時間がかかるのかといったことすら、私たちは知りませんでしたので、4月から通常どおり授業を受けてもらえるかどうか非常に不安でした。目の見えない人が利用できる辞書や参考書はあるのか。すべて新たにリサーチしなければわからなかったのです。

教科書は、支援室が点訳の手配をしてくださって、4月からの授業を普通に受けてもらえる形になりましたが、辞書等に関しては、どうもあまり充実した内容のものがないらしいとわかりました。研究室で準備したのは、教科書の解説CDです。ある兼任講師の先生が教科書の内容を、自分で音声吹き込んで説明CDを作っていたので、お願いして複製をいただき、当該学生に渡しました。あとは、教科書に対応した単語リスト。デジタルで全単語のリストを教育講師の先生に作っていただきました。

また、新学期が始まるにあたり、授業運営のサポートという趣旨でTAを採用しました。このTAの役割は大変大きなものでした。基本的にはペアワークの相手をしてもらいました。学生とTAは「ブレイルセンス」という点字端末でやりとりをしており、学



佐藤 邦彦

生がブレイルセンスに文字を入力したときに、ちゃんと正しいスペルで書けているかどうかのチェックしてもらいました。また、このTAはスペイン語のできる人でしたので、少し時間があいたときなどに、学生が理解できていない点などについて補足してもらいました。ただ、支援室が考えている学生への支援のあり方と、研究室側が授業運営本位に考えている取り組み方との間でギャップもありまして、春学期中は



ブレイルセンス

なかなかうまくいかないところもありました。特に技術的な問題として感じたのは、文字出力用具の問題です。課題等の提出に関しても、デジタルデータをもっと活用すべきであり、学生には手書き対応をもらって非常に負担をかけてしまったことが反省点です。

秋学期は個別指導という形に移行しました。支援室でスペイン語研究室員や学生本人を交えた面談を実施し、ブレイルセンスを実際に見て、授業でどのように使うことができるかを確認しました。配付物もメールで受け渡しするなど、デジタルデータを活用しながら授業を行っていきそうだというめどをつけることができました。

ブレイルセンスで使えるような形でデジタルデータ化した場合、スペイン語の特殊文字の表示に関して問題が起きました。学生が使っていたブレイルセンス上では、特殊文字を正しく扱うことは可能でしたが、外部との間でデータの移植を行うと、特殊文字が正しく反映されなくなってしまったのです。例えば、疑問文の文頭のひっくり返したクエスチョンマークは通常のクエスチョンマークになりますし、アクセント記号などの補助記号の付いた文字は、通常のアルフベットになってしまうのです。この問題については次年度以降、対応策を講じました。どの機材でも扱える代替表記を決め、一貫してそれをを用いることにしたのです。例えば、アクセント付きの文字は、文字の後に「/ (スラッシュ)」を入れて表記するというような形です。この取り決めのおかげで、特殊文字の問題を解決することができるようになりました。

個別指導全体を通して思ったことは、説明者は、情報を伝える際、可能な限り言葉でわかりやすく整理しなければならないということです。例えば、ものを指差して示すということはできません。言葉できちんと、ただしあまり長々と理屈っぽくならないようにわかりやすく伝えることの重要性を痛感しました。また、図を見て答える練習問題に取り組むときがありますが、点字訳の教科書では、図が表すことが全部細かく言葉で書いてあるそうです。中には要らない情報もありますが、その判断は点訳者にはできません。点字化にあたっては、科目の専門家が必要な情報提供をするなど、何らかの形で作業に参加していかなければならないのではないかと考えています。どうもありがとうございました。

石坂 佐藤先生、ありがとうございました。

続けて、ドイツ語教育研究室の新野守広先生に、事例を報告していただきます。

事例報告②

ドイツ語教育研究室の経験から

新野 守広

全学共通カリキュラム運営センター言語系科目構想・運営チームリーダー、
ドイツ語教育研究室主任／異文化コミュニケーション学部教授

新野 佐藤先生はしょうがい学生にスペイン語を直接教えた経験に基づいた報告をされましたので、私は研究室として対応した経験をお話しします。2015年の2月上旬に、しょうがい学生支援室から、来年度入学するしょうがい学生がドイツ語の履修を希望しているので、学生本人との面談に出席してほしいという連絡がありました。当研究室では経験のないことでしたが、授業が始まる前に本人と話し合っただけで何ができるのかを聞こうということになりました。当日はドイツ語教員4人が面談に同席しました。



新野 守広

学生本人からしょうがいの状況の説明を受け、我々からは、授業の進め方、教科書の使い方や、1クラスの学生数、教室内の机の配置といった細かいことを説明しました。我々はその時にブレイルセンスを初めて見ました。実際に操作をしてもらおうと、USBやインターネット経由で情報をパソコンにも取り込むことができるし、音声読み上げソフトもあると聞いて、これは行けそうだという大きな手応えを感じました。ドイツ語にもスペイン語と同様に特殊文字があります。これが点字でどう出てくるのか疑問に思っていました。ある特定の方法でできそうということがその場でわかったのもよかったです。

面談にはドイツ語から教員が4人も出席して、学生にとってプレッシャーにならないかとも思いましたが、本人と話をしたり、ブレイルセンスなどの補助機器の動作を実際に見たりして、具体的に何をすればいいかをその場で共有できたということは、大いにプラスになりました。スタッフの共同作業という雰囲気生まれ、研究室として対応する心構えができたというのでしょうか。そういう体制をつくれたことは、よかったと思います。

学期ごとに、非常勤の先生も含めて研究室の教員全員が集まる機会があります。担当連絡会というのですが、そのときに、しょうがい学生の授業状況を担当教員に報告し

てもらい、すべての教員が一定の理解ができるようにしました。次の年度には聴覚しょうがい学生がドイツ語を履修しましたので、その学生についても、授業の状況を担当者連絡会で担当教員から報告してもらいました。しょうがい学生だけではなく、クラスにはいろいろな学生がいます。こうした情報の共有は、学生目線の授業運営を教員全員が心がけるよいきっかけになったのではないかなと思っています。どうもありがとうございました。

石坂 新野先生、ありがとうございました。それでは今までの先生方のお話を受けて、コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科2年の大島康宏さんから話をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

コメント

大島 康宏

コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科2年

大島 今日は私が大学で受けた英語とドイツ語の科目で感じたこと、先生方に工夫していただいたことについてお話ししたいと思います。

最初に、私のしょうがいについて説明をさせてください。私には視覚しょうがいがあって、右の視力はゼロでまったく見えない状態、左は0.01未満で、光や影とか、はっきりした色が見える程度です。学習の際には点字を使っていて、ブレイルセンスや、音声が出るパソコンを利用しています。

1年次の英語では、ディスカッション、プレゼンテーション、ライティングの3科目を受けました。中でもディスカッションは8人の少人数クラスで、いろいろな人と会話しやすく、楽しいクラスでした。授業では点字の教科書を使用しました。先生にお願いしたことは、グループ分けをするときに名前を呼んでいただくことです。ペアワークをするとき、「そこそこの人」とか、「向かい合っている人同士」と言われても、誰と組めばいいのかわからないので、誰とペアを組めばいいのか名前を呼んでわかりにしてくださいました。ディスカッションの授業では、毎回マークシート形式の小テストがありました。私の場合は、選択肢が点字になっている紙を用意していただきました。先生が問題を読み上げて、私が紙に書いてある答えの部分指で触り、先生がその答えをマークシートに記入してくださいました。



大島 康宏

一番大変だったのは、プレゼンテーションのクラスで、ジェスチャーやアイコンタクトのやり方を理解するのが難しかったです。アイコンタクトは目線が合っているかわからなくて、クラスメイトのほうを向けば誰かと目が合うだろうと考えながら行っていました。ジェスチャーは教科書のイラストの点字説明を読んでもなかなかイメージできませんし、ほかの学生のプレゼンテーションを見て、動きを参考にすることもできません。最初は戸惑いましたが、クラスメイトや先生方が教えてくださったので、徐々に慣れることができました。プレゼンテーションではクラスメイトとお互いを評価することがあるのですが、話を聞いて内容は大体わかっても、どんな写真を使っているか、どういう身体の動きをしているかまでは、時間に限りもあって全部説明してもらうことはできなくて、もうちょっと理解できたらよかったなと思うことがありました。

2年生からは英語副専攻科目を履修しています。春学期にCurrent English1とEnglish communication1を、秋学期はDebateを履修しています。

Current English1はリーディングの授業で、皆が持ってきた英語の新聞記事をシェアして意見を言ったり、要約をしたりします。最初、先生は皆が印刷してきた記事を各自が読んで、それをもとにグループワークをするよう準備されていました。ですが、私は印刷されたものを読むことができないので、先生と相談した結果、3人ずつぐらいのグループに分かれ、お互いが記事を音読し、その後ワークをする形に変更してくださりました。English Communication1は人数が5人と少なく、アットホームな雰囲気での授業でした。週2回あるのでゆっくり授業が進み、クラスメイトや先生がスライドの内容を英語で説明してくださいました。Debateは、テキストを読んで、それについて意見をまとめてから2グループに分かれてディベートするという内容です。テキストは、先生が毎週授業で使う部分を、事前にデータで送ってくださいます。

ドイツ語は1年次に履修しました。教科書は点訳してもらったものを使って、辞書は、ブレイルセンスに対応した点字の電子辞書を購入しました。点字の教科書と普通の文字の教科書でどれぐらい量が違うかということ、10倍以上の差があって、毎回、授業ごとに持ち運びするのが大変でした。ドイツ語は、ドイツ語特有の記号があったり、大文字の記号やピリオドの形が英語と異なったりして、慣れるのに時間がかかりました。教科書を点訳してくださった団体の方が、記号や略字の一覧も作成して下さって、ありがたかったです。

ドイツ語では、中間や期末テストをブレイルセンスで受験しました。紙に印刷された点字の問題用紙を使い、ブレイルセンスで回答用のテキストファイルを作成し、そこに回答を書き込んで、最後にUSBで先生に提出しました。ブレイルセンスはドイツ語の特殊文字を入力できないので、アルファベットの組み合わせを代用しました。教えてくださった先生は、点字を勉強して下さり、ドイツ語の発音一覧も点字で作ってくださいました。親切に教えていただき、感謝しています。

最後に、まとめます。まず、ディスカッションやディベートのように言葉によるコミュニケーションが多い授業は、参加しやすかったです。また、どの授業でも先生方が

資料をデータで送ってくださったので、スムーズに授業を受けることができました。写真や板書などの説明は、いろいろな授業で必要だったんですけども、先生方がいつもそれに対応してくださったのがありがたかったです。

僕にとって一番大切で、ありがたかったのは、困ったときにいつも先生方が相談にのってくださったことです。1回目の授業の時に、どんなサポートが必要かということを書き紙に印刷した配慮依頼文書を先生に渡しているのですが、授業を受けていく中でお願いしたいことが変わることもあります。そのたびに先生方と相談できるということが、大きな安心感につながりました。相談してもすぐに解決しないこともありましたが、相談できるという安心感があるだけで、とても授業にのぞみやすかったです。ありがとうございました。

石坂 大島さん、ありがとうございました。とてもいいお話を伺えたと思います。

質疑応答

石坂 それではまず、英語教育研究室主任の師岡淳也先生から一言お話をいただきます。

師岡 立教大学では英語の科目が必修で、1年次生は4,500人強います。そうすると、いろいろなしょうがいを持った学生に対応する必要が出てきて、どうしてもクラス配当だとか、教員に対する配慮依頼文書を送ったり、何か問題が起こったときに対応したりすることで手いっぱいになってしまって、本来の学習効果の指標となるような学習動機づけだとか、知識やスキルの獲得といったところまではなかなか気が回らなかったというのが正直なところですよ。今回、学生の立場からの意見を聞くことの大切さを改めて感じました。

現在、我々はいろいろなしょうがいを持った学生に対して専門的な知識がないまま対応しなければいけない状況があります。診断名は同じでも、程度によって対応が全く異なるということもあり、時間的な制約と限られた情報の中ですべてに対応することは、教員個人の熱意だけでは限界があります。スタッフや予算の充実、学内組織の連携のシステムといったことを充実させることが必要なのではないかと思えます。

石坂 ありがとうございます。師岡先生から、我々教員は専門的な知識や経験もなく対応している現状があるというご指摘がありましたが、そういう我々を支えてくれたのがしょうがい学生支援室です。支援室から一言お願いできますか。よろしくお願ひし

ます。

菅谷 しょうがい学生支援室の菅谷です。大島君のプレゼンがすばらしくて、びっくりしております。これまでいろいろな学生からの申し出があるたびに、先生方に相談してまいりました。特に外国語科目は必修ですので、現場の先生方が個々の学生に応じた工夫をさせていただきありがとうございます。本当にありがたいと思います。今日伺った話、そのマインドを、ほかの学生や教職員の方にも共有していただきたいなとしみじみ思いました。ありがとうございます。



石坂 これからも日常的に我々教職員を助けていただくよう、どうぞよろしく願いします。それでは、ご登壇くださった3人の先生方に一言いただければと思います。まずは宮城先生から。

宮城 もう大島さんの発表に集約されていると思います。先生方が本当に熱心、かつ、臨機応変に対応した結果、教育の現場がかなりスムーズに動いている印象を受けました。

さまざまなしょうがいに向き合うなかで、教育上対応が難しい部分もあると思います。こういう感覚しょうがいなどを研究していると、本来、教育とか情報伝達のなすべきことは何なんだろうというプリミティブな部分に立ち戻るきっかけになることが多いです。今、盲ろうという、視覚と聴覚の重複しょうがいの方のeラーニングの研究しているのですけれども、今日のシンポジウムを受け、落とすべき情報、そして付加すべき情報というのを改めて考えてみたいと思っています。

先生方にはご負担も多いかもしれませんが、そうして工夫し授業をつくりあげる楽しみ、面白さを見つけていただけるといいのではないのでしょうか。

佐藤 新野先生のお話にあった、情報を研究室全体で共有していくという姿勢に感銘を受けました。しょうがい学生というのは、数としては全体であまり多くないものですが、ともすると特殊なケースのような受けとめ方をしてしまう場合もあります。そのときどきの対応で終わらせるのではなくて、やはり後々にも伝えていける形を残していくという意味でも、全体で共有していくことの大切さを感じました。

新野 師岡先生も指摘されていましたが、基本的に先生個人の熱意に依存してはいけないのだと思います。個人の熱意や時間には限界があります。ですから、大学全体としてサポートできる体制をつくっていく必要性を感じています。自分のクラスにしょうがい

を持った学生が入ってきたときに戸惑い、ある時にはパニックを起こしてしまう先生もいらっしゃると思います。そういう先生方を支えていくシステムを大学ではつくってもらいたいし、研究室はそういう先生方が孤立しないようにしていこうと考えています。学生をサポートし、学生を教える先生もサポートする。両方をサポートできる体制が徐々に整っていけば、うまく回っていくのではないかなと思っています。

石坂 皆さまありがとうございました。それでは、何かご質問やご意見等があればお受けしたいと思います。

中島 全カリ副部長の中島です。技術的な問題を1点質問させていただきます。語学の教材というのは、大体2つの言語からなっていますよね。英語なら、英語と日本語。そういうふうにかかれた教科書を機械で点訳する場合、日本語の部分は日本語、スペイン語の部分はスペイン語でちゃんと点字にしてくれる、ないしは読み上げてくれるのか、どうか。今日扱われた機械のマルチリンガル対応は、どういう段階にあるのでしょうか。

宮城 点字端末というのは、日本の点字でメニュー構造が表示されますが、その内容のコンテンツがどのような言語で書かれてあっても、その言語に対応した点字で出すということは変わりません。各言語に対する点字というのがありますので、その点字で表示されることになります。ただ、先ほど話がありましたが、特殊記号など正確に表示できない場合もあります。例えば、ブレイルセンスにその言語の辞書を組み込めば、特殊文字も表示可能となりますが、表示するデータは、あらかじめパソコンなどで点字データとして作成しておく必要があります。

大島 日本語と英語の違いということ言えば、書き方とか、大文字があるかとかないかとかが違うので、それで判断しています。読み上げソフトについても、PC-Talkerというソフトは英語には対応しています。

視覚しょうがい者はどの国にもいるわけですから、そういうソフトウェアは開発されているはずですが、それがもう少し集まってくると、私たちの勉強の環境も変わるのではと期待しています。今、私のブレイルセンスに入っている辞書には、ドイツ語も、スペイン語も、イタリア語も、ロシア語もあります。いろいろな言語の点字辞書が次々にできていますので、徐々に変わってきています。

石坂 ありがとうございます。ほかに、いらっしゃいますか。

矢野 朝鮮語の兼任講師の矢野と申します。質問といいますが、感想を。私の専門は韓国語の会議通訳で、通訳学校で教えております。そちらに全盲の方が通訳の勉強をしに来られました。面談をしたいと言われましたが、私も含めて講師たちの反応は、一言、

「無理」でした。だけれども、大島さんのケースと同じように、実際に私たちの目の前で機械を使ってどういうふう to 授業に対応できるかを証明していただいたことで、私自身非常に心が軽くなりました。要は、自分たちは情報を知らなかっただけだということがあったのです。今日のお話を聞きながら、私たちは知らないでいることがすごく大きいのではないかと改めて思いました。

石坂 ありがとうございます。それでは最後に、我々全力りの主催者の一員として、全力り副部長の中島先生からご挨拶をお願いします。



中島 俊克

中島 今日改めて感じたことは、しょうがいを持っていてる学生を受け入れて、一般の学生諸君と同じように学ぶということがいかに大事かということです。

学習を支援するいろいろな道具が開発されているということもよくわかりましたけれども、大事なのは使い方なんです。それを使う人間同士の関係があってこそだということです。先生と授業を受ける学生が熱心なのはもちろんですが、まわりの支えがないと語学のクラスは成り立ちません。大島君の話を聞いて

てそのことがよくわかりました。

教育効果というのは、語学のスキルアップだけではなく、それを通じた人格形成というか、社会性の涵養という意味での人間形成にもあります。多様な人間とともに生きる感覚を養う、支え合う心を養う。我々が大学で教えているのには、そういう学生を養成するという目的もあるわけですね。そのために一番いいのは、しょうがいのある人に、特に語学のような小さなクラスに入ってもらって、お互いに支え合うという経験を学生みんなが持つということではないでしょうか。我々立教、特に全力りが目指している全人教育というのは、そこが原点であり、一番大事にしなければいけないところです。

今後は、語学の先生方にはクラスづくりに一層努めていただくことはもちろんですが、我々も支え合い、立教大学全体の教育を盛り上げていくことが必要なのだと、肝に銘じました。

以上をもって閉会の挨拶といたします。本日はありがとうございました。